

## わが国における統合医療は可能か

Is the Integrated Medicine in Japan possible?

岡山大学医学部胃腸器外科学教室

Department of Gastroenterological Surgery, Okayama University of Medical Sciences.

客員研究員 倉林 譲

Visiting Researcher Yuzuru KURABAYASHI DVM&amp;Ph.D.

## Summary

The medical treatment called the alternative medicine or complementary and an Integrated medicine is wide and it is said in recent years. It is assumed, "All of the medicine and the Medical treatment except Western medicine that is taught in University Department of Medicine, and done in a general hospital" with the alternative medicine. For instance, I want to examine whether integrated treatment that brings these Alternative medicine and Western medicine treatment together can be done in our country in the document about the strategy though there are Acupuncture & Moxibustion therapy, a Chinese medicine, Supplement, Herb treatment, Ayulbadar, Yoga, Cairopactic, a Shiatsu and a Massage. Aromatherapy, Homeopathy, Reflexology, a Tradition medicine, and a Folk remedy etc, and the Therapeutic gain is raised by each method. It is necessary to build a Central hospital that integrated them according to various places by the method of doing in China, to gather the expert in each treatment field, to make a best treatment Method concept for the patient consulting, to do the system making to which it can treatment equally immediately by all those who treat, and to practice the strategy immediately.

## I. 統合医療とは

これまで医療の現場では西洋医学を中心とした治療が行われてきた。しかし、近年になって、西洋医学以外の代替医療の重要性へ目が向けられている。西洋医学に加えて、伝統医療や代替医療などを効果的に組み合わせた医療体系を統合医療といっている。患者にとって最良の医療を分野の区別無く行なうことを目的としており、統合医療の考え方が最初に提唱されたのはアメリカであった。アメリカでは1992年国立衛生研究所に代替医療調査室が設置されて以来、代替医療の研究が進められている。代替医療とは鍼灸 1)、2)、3)、4)、5)、6)、7)、8)をはじめ、アーユルバーダーや漢方 9)、10)、11)、12) など、サプリメント(栄養補助食品) 13)、14)、15)、16) による栄養療法やハーブ療法 17)、18)、19)、20)、21)、22)、23)、インドの伝統医学であるアーユルバーダー 24)、25)、26)、27) やヨーガ 28)、29)、30)、31)、32)、33)、34)、カイロプラクティック(脊髄調整療法) 35)、36)、37)、指圧やマッサージ 38)、39)、40)、41)、42)、アロマセラピー 43)、ホメオパシー(同種医療)、44)、45)、リフレクソロジー 16)、17)、48)、49)、50)、51)、52)、ならびに伝統医学 53)、54)、民間療法 55)、代替医療に含まれ、世界に10000種類ほどあるといわれている。

アメリカではすでに代替医療が定着しつつあり、現在アメリカ人の45%が、何らかの代替医療によって治療を受けていることが明らかになっている。

西洋医学の技術は長年の研究によって目覚しく進

歩し、病気の診断や救急医療など、あらゆるシステムや手術によって高度な治療を行なってきた。しかし、技術が進歩しても、西洋医学では解明が難しく病気も多くあり、生活習慣病や、慢性疾患、または不眠症、うつ病、頭痛などの不定愁訴などがそれにあたる。西洋医学の進歩が限界ならば、別な療法で病気の治癒を試みようという考えから、代替医療を取り入れた統合医療の導入が急がれている。また、近年医療を取り巻く問題は、国民医療費の高騰や少子高齢化など、様々な問題を抱えている。そのため統合医療は人々の健康維持のためではなく、医療における様々な問題を解決する手段としても期待されている。

## II. 統合医療のわが国の現状

これまで日本では西洋医学を中心とした医療が行われてきたが、しかし、近年、西洋医学に代替医療を取り入れた統合医療が注目されてきている。今、医療現場において統合医療が注目されている。統合医療とはこれまでの西洋医学の医療に、相補・代替医療を組み合わせた医療であった。代替医療とは西洋医学の領域に属さない療法を総称したもので、未だ、明らかになっていない分野の多い医療である。欧米では国をあげて代替医療の研究を進めており、サプリメント療法やハーブ療法などの代替医療が国民に定着しつつある。このような欧米の流れを受け、日本でも近年代替医療への関心が高まっており、日本では明治以降、西洋医学にもとづく、治療が中心に行われてきた。西洋医学は東洋医学などの伝統

医療に比べて歴史が浅く、解剖学や生理学を基本に病気に効果的で、治療に即効性がある点で優れており、また、科学的根拠に基づいているため、ある程度確実な効果が期待できる。今や日本は長寿大国となったが、それまでに西洋医学は不可欠な要素であったといえる。日本における医療の技術はめざましい進歩を遂げたが、未だ西洋医学では解決できない問題が多くある。それを補う可能性を持っているのが代替医療である。

西洋医学が薬剤や手術によって病気の原因を除去するのに対し、代替医療の多くは自然治癒力を高めたり、生活習慣の改善、病気の予防などを行なうことに主眼がある。代替医療の中には、がんやエイズ、その他の難病に効果があるものもある。日本ではまだなじみの薄い代替医療であるが、アメリカでは急速に発展している医療分野である。代替医療の範囲は前述のごとく、広く、漢方、鍼、灸、アーユルヴェーダー、食事療法、心理療法などの認められているものだけでも100種類ほどあるといわれている。世界的に見れば代替医療による治療を行なっている国は多く、西洋医療を行なう国は少数と言うのが実態であり、近年日本では代替医療への関心が高まっている。1998年には第1回日本代替医療学会が開催された。また、代替医療関係者の終結した代替・相補・伝統医療連合会が発足し、新しい代替医療の確立に向けて取り組んでいる。また、代替医療の研究において、日本は欧米と比較し大幅な遅れをとっている。今後日本でも代替医療の研究が進み、統合医療が進み、統合医療の現場で秘匿浸透し、今後、両者が効果的に組み合わせられ、統合医療が社会に浸透し、多くの病気を解決することが期待される。

しかし、西洋医学は薬剤や手術、放射線など非日常的な方法によって病気の原因をとり除く治療であるため、薬剤の副作用、手術の後遺症、医療費の増大などの問題がある。また、最近では医療訴訟やトラブルが多いのも問題となっている。今日では代替医療ばかりが注目され、西洋医学に否定的な見方が広がっているが、西洋医学なくして現在の医療の現場は成り立たないのが現実である。統合医療で大事なことは、西洋医学と代替医療を区別することなく、全ての手段が治療や健康増進の選択肢となることである。

また、この統合医療は動物実験によっても解明されつつあり、下支えになっていることは疑いない。

### Ⅲ. 統合医療の歴史

近年、日本では西洋医学と代替医療を組み合わせた統合医療が注目を集めている。統合医療の歴史はアメリカの医学、アンドリュウ・ワイル教授によって提唱されたことから始まった。ワイル氏は伝統医療や薬用植物などの研究を通じてもともと人が持っている自然治癒力を最大限引き出すための医療が必要だと考えた。

アメリカでは1990年になると様々な代替医療が注目を浴び、公的機関による研究、調査が活発に行なわれるようになった。1992年には世界的な医学研究施設である米国国立研究所の中に代替医療事務局が設立され、今日も代替医療の研究が行なわれている。

現在ではハーバード大学を初めとするアメリカの医療系の大学の多くでは、統合医療の考え方を取り入れ、また、アメリカ人の医療系大学多くでは統合医療の考え方を取り入れ、また、アメリカ人の半数近くの人が統合医療によって治療を受けているなど、国民にも統合医療の考え方が浸透している。

日本の治療は、明治維新以前では漢方や鍼灸などの治療は医療とは別々なものとして存続し、西洋医学の医師と、伝統医療の医師は全く別な現場で医療を行なっている。しかし、アメリカの流れを受けて、近年、日本でも統合医療が重視されるようになり、鍼灸師や漢方医、カイロプラクターなどの代替医療などの専門家を配置している病院が増えている。

### Ⅳ. わが国における統合医療の実際

#### 1) 栄養療法

近年、日本では西洋医療に代替医療を取り入れた統合医療が注目を集めている。代替医療には多くの種類があるが、栄養療法もその一つである。栄養療法とは患者の栄養状態を改善することによって、病気の治療や予防を行なう治療である。不足している栄養素を補給し、病状によっては制限することで、内臓や血液の働きを改善する。そして細胞に必要な栄養素を送り込み、人間が本来持っている自然治癒力を高める。栄養療法では、食事を管によって腸から栄養を入れる。「経腸栄養法」と点適などによる「静脈栄養法」によって栄養が補給される。これまでの医療の中心となっていた西洋医学では、薬剤や手術によって病気の原因を除去する方法が行なわれてきた。しかし、薬剤や手術は副作用や体への負担が心配され、人間の体の不調に西洋医療で解決できない問題が多いことなどから、栄養療法を初めとした代替療法へ関心が高まってきた。人間は栄養が不足するとお腹がすくだけでなく、様々な病気を引き起こすことになる。体を作る最も基本的な栄養素を最適な状態に整えることは、病気の治療や予防にとって重要なことになる。

現在中高年に多い糖尿病や高脂血症などの食習慣病は、栄養療法を取り入れることで薬剤の効果を高める。また近年増加しているメタボリックシンドロームは、早い段階で栄養療法を行うことで病気のリスクを減らすことができる。栄養療法は統合治療の進んでいるアメリカでは、難病の治療として既に効果をあげている。しかし、日本ではまだ保険が適用されておらず、普及していないのが現状である。

#### 2) フコイダン

近年、がん治療ではフコイダンを利用した統合医療が注目されている。フコイダンとはコンブ、ワカメ、モズクなどの海藻類に含まれている硫酸化多糖類で、ヌルヌルした成分のことで、フコイダンの主な作用は抗腫瘍作用、コレステロール低下作用、血液凝固阻止作用、胃潰瘍治癒促進作用、肝機能向上作用、抗ウイルス作用、抗アレルギー作用、抗糖尿病作用などがある。がんだけでなく、糖尿病、胃潰瘍、ヘルペス、高血圧、慢性肝炎、アトピー性皮膚炎などの多くの現代病の治療に役立つ優れた成分である。フコイダンには、アポトーシス作用、血液新生抑制作用、免疫力強化作用によってがんを抑える作用が明らかになっている。アポトーシスとは古い細胞が自然死する正常な代謝のことであるが、フコイダンのアポトーシス作用はがん細胞だけに直接働き、がん細胞が死滅するように導く。血液新生抑制作用はがん細胞が勝手に血液を作り、がん細胞に溜め込むのを抑制する作用がある。

また、がんの進行を遅らせ、治療の可能性を高める効果がある。免疫強化作用とは患者の免疫力を維持し、さらに向上させる作用で、フコイダンをごん治療に取り入れることによって直接がん細胞を抑えると同時に、抗がん剤や放射線療法の副作用が軽くなり、体調や食欲を保ちながら、つらい化学療法を乗り越えられる可能性が高まることが分かっている。フコイダンのがん治療効果には、医学的なメカニズムはまだ解明されていないものも多く、現在も研究が進められている。フコイダンは現在体内に吸収されやすい低分子化処理する研究が進み、飲み薬などによって治療に使用されている。今後さらに研究が進み、フコイダンを利用した統合医療が多くの人々の健康維持に役立つことが期待されている。

### 3) サプリメント

近年増加している生活習慣病など慢性病の治療では、西洋医療以外に代替医療を取り入れた統合医療が注目を集めている。代替医療の研究が進んでいる欧米では既に統合医療を取り入れた治療で多くの人々が病気を改善している。アメリカで行われる代替医療の中で、最も利用の多いものにサプリメント療法があげられる。今日、サプリメントは日本でも普及しているが、サプリメントの必要性が高まった背景には、食材自体の栄養が昔より減っていることが考えられる。たとえば人参に含まれるカロテンの量は50年前の8分の1から20分の1にまで減っており、50年前と同じ栄養量を摂りたいと考えれば、人参を8本から20本食べなければいけないことになっている。特に現代はビタミンやミネラルなどの栄養素の不足が健康上の問題となっている。栄養の偏りや不足によって引き起こされる病気は多くある。食事だけで栄養バランスを調整できればよいが、それは実際には困難なことである。サプリメントを上手に活用することで簡単に足りない栄養を補うこと

ができ、病気の予防や治癒、改善効果が期待できる。最近の日本の治療でも、がんにはフコイダン、骨粗しょう症にはカルシウムとビタミンD、更年期障害にはイソフラボンなどのサプリメントが利用されている。サプリメントは薬局などでも市販され、手軽で効率よく栄養を摂ることができる優れたものであるが、病気になったからといってすぐサプリメントに頼るのではなく、運動習慣やストレス改善の努力をすることも重要である。

### 4) 免疫療法

現在がんの統合医療は、免疫療法が多く取り入れられている。免疫とは人間がもともと備えている、異物に対する体の防御機構であり、免疫力を強化することによって病原を排除し、健康な体に戻す治療を免疫療法という。がんをはじめとするさまざまな病気は、免疫力の低下が大きな原因となっている。免疫力は白血球と深い関係があり、白血球は体内で有害物質や悪い細胞、細菌やウイルスを排除する重要な役割がある。免疫療法は白血球を活性化し、病気の原因となる悪い細胞やウイルスを排除する治療である。免疫療法には、健康食品、免疫賦活剤、サイトカイン療法、ワクチン療法、心理療法、活性化自己リンパ球療法などいろいろな方法があり、単独で実施される場合と、他の現代医療と併せて実施される場合がある。免疫療法は現在も研究が進められ、新たな方法が開発されている。これまでの西洋医学による治療では薬剤が多く使われてきたが、薬剤には少なからず副作用があり、患者にとって肉体的な苦痛を伴う治療でもある。免疫療法は副作用が少なく、苦痛の少ない治療と言える。手術や放射線、薬剤によるがん治療で効果があがらなかった人で、免疫療法で改善する例が多く見られる。また、免疫療法はがん治療だけではなく、リウマチや生活習慣病などの改善効果も注目されている。統合医療の必要性が高まる現在、体の基本的な機能に着目した免疫療法は、今後の医療において重要な役割を担うものと考えられている。

### 5) ホリスティック医療

ホリスティック医療とは、人間の体や心、環境などを総合的に診断し治療する医療を意味している。近年、統合医療の重要性が高まる中、代替医療に加え、ホリスティック医療が注目を集めている。ホリスティックという言葉はギリシャ語で「全体」を意味しており、代替医療は病に対して施される西洋医学以外のさまざまな医療のことを指しているが、ホリスティック医療は人生や命、生きることなどに対して施される医療を指している。ホリスティック医療において大切なことは、人間がもともと備えている自然治癒力を高め、増強するための治療である。

そのために病気を治すのは医師ではなく患者本人であること、そして患者自身が生活習慣や環境を改

善する「自己療法」を基本としている。具体的には西洋医学の良い面と、東洋医学や自然療法などの代替医療を統合し、最も適切な治療を行っており、また病気や死に否定的な捉え方をせず、病気や死の深い意味を考えながら、奥深い人生を送ることを目指す医療でもある。統合医療が浸透していない日本では、まだ統合医療とホリスティック医療の違いが理解されていないのが実態である。ホリスティック医療は精神疾患、がんなどの生活習慣病、アトピー、膠原病などこれまでの西洋医学では解決が難しい病気の治療で必要性が高まっている。高齢化社会が進み、生活習慣病が増加する現代、医療に対する人々の考えも多様化している。統合医療と同様にホリスティック医療は、今後日本の医療の中心となるべき医療として注目されている。

#### 6) ハーブ療法

統合医療の重要性が高まっている今日、西洋医学以外の代替医療が注目を集めている。代替医療にはさまざまな種類がありますが、代表的なものにハーブ療法がある。ハーブ療法は世界でも古くから行われてきた薬用植物を用いた民間療法であり、日本でも漢方や民間薬として、昔から東洋ハーブを医療に取り入れてきた。西洋医学が発達した今日でも、やけどにはアロエ、風邪には「しょうが」と言ったように、私たちの生活の中にハーブ療法は浸透している。ハーブは体に負担をかけず、ゆっくり体の免疫力や自然治癒力を引き出すことにあり、ハーブの種類によって効能もさまざまであるが、多くのハーブは抗酸化作用、抗ストレス作用に優れている。日本ではこれまで西洋医療が中心に行われてきたが、薬剤多用の弊害、医療費の高騰が近年社会問題となっている。また高齢化社会が進み、生活習慣病やメタボリックシンドロームが増加し、人々は健康への関心が高まっている。そのような状況下で、体にやさしいハーブ療法は日本でも少しずつ浸透し始めている。日本に先駆けて代替医療の研究を進めていたアメリカでは、ハーブを用いたハーブサプリメントや健康食品などは人気が高く、ハーブの健康食品市場は50億円と言われている。現在ハーブ療法は西洋医学の観点からも研究が進められ、代替療法の中では数少ない科学的な根拠のある療法として関心が高まっている。今後日本の医療の現場では、これまでの西洋医学にハーブ療法などの代替医療が取り入れられた統合医療によって、健康増進や病気の治癒に効果的な医療が行われることが求められている。

#### 7) 鍼治療

近年注目されている代替医療の中に「鍼治療」がある。鍼は本来中国医学の一つであるが、最近ではアメリカで大きなブームを起こしている。針治療は鍼の刺激によって体が備えている力を引き出す治療方法である。

自然治癒力を高め免疫機能を整える作用や、抗炎

症作用、鎮痛効果を高める作用があり、西洋医学の補助的な療法としてさまざまな病気の治療に取り入れられている。アメリカの食品医薬品局FDAは、当初鍼治療を国の医療として認めていなかったが、それは科学的な解明がされていないこと、鍼が体の神経や血管を刺す危険性が理由であった。また鍼による感染の問題も指摘されていた。今日では鍼灸学会による働きかけによって問題は解決し、アメリカでは重要な代替医療の一つと考えられている。またアメリカで麻薬中毒の治療に利用されたことから、鍼治療は世界中で行われるようになってきている。

ヨーロッパではホメオパシー治療、ハーブ治療と並んで鍼治療は三大CAM（相補・代替治療）と言われている。鍼治療は腹痛、便秘などの消化器系の症状から、精神疾患、目、耳、鼻、咽喉、呼吸系、婦人科系など幅広い病気に効果がある。これまで日本の医療の中心だった西洋医学では、薬や手術によって病気の原因を除去する治療が行われていたが、しかし現実には西洋医学では解決できない問題が多くあった。そこで西洋医学に代わる医療として代替医療が注目を浴び、西洋医療と代替医療を統合した統合医療の必要性が高まっている。こうした時代の流れを受け、日本でも針治療は統合医療の中の重要な医療の一つとして定着することが期待されている。

#### 8) 伝統医療

近年医療の現場では統合医療の重要性が唱えられている。統合医療は西洋医学と代替医療を統合した医療のことである。代替医療は世界にも多くの種類がありますが、その中に伝統医療と言われる分野があり、伝統医療にはさまざまな種類があり、代表的なものに「中国医学」、中国医学を日本独自に変化させた「漢方医学」、インドの医学「アーユルヴェーダ」、他にも「自然療法」、「温泉療法」などがある。このような伝統医学は人間が本来備えている自然治癒力を高めることを基本としており、また、近代の西洋医療が病気に対する治療を行うのに対して、伝統医療は個人個人の症状にあわせた証治療を行うことも大きな特徴である。伝統医療は西洋医学に比べて歴史が古く、経験的な方法によって生み出された医療であり、ほとんどのものは科学的な解明がされていない。漢方薬や鍼など最近になり少しずつ解明された医療もあるが、まだすべてが解明されていないのが実態である。これまで先進国で中心に行われてきた西洋医学は、病気の原因を徹底的に解明し、投薬や手術などの科学的に実証された方法（EBM）で治療を行っている。さらに統計学的に医学を分析し、治療効果を計るが、しかし、人間の病気には統計学では計り知れない例外がある。伝統医療は個人を重視する医療であり、西洋医学ではできなかった医療を行う。このような個人の医学が見直され、西洋医学では解決できない問題を伝統医

療に求める人が増加し、今日、伝統医療を取り入れた統合医療に関心が高まっている。

#### 9) ホメオパシー治療

日本のホメオパシー治療という言葉はまだ一般的に知られていないが、近年統合医療の導入が急がれる中、ホメオパシー治療が代替医療の一つとして注目を集めている。ホメオパシー治療の起源は古代ギリシャにまで遡るが、近代のホメオパシー治療は今から約200年前に、ドイツの医師であるサミュエル・ハーネマン氏によって始められた。ホメオパシーのホメオは「同じようなもの」、パシーは「病氣」という意味があり、ホメオパシー治療は「同種療法」「類似療法」「同毒療法」とも呼ばれている。この治療の内容は「症状を引き起こすものによって症状を取り去る」という同種の法則を基本にしている。アレルギーなどの原因になる物質を、成分がなくなるほど薄めたものを体内に取り入れ、それに対する体の免疫力をつけ病気を治すという体にやさしい治療である。ヨーロッパではホメオパシー治療と鍼治療、ハーブ治療の三つが、相補・代替医療として基本的な治療法となっている。イギリスを始め、ヨーロッパの多く国ではホメオパシー医が王室主治医になっている。現代医学は近年著しい進歩をとげたが、反面、現代医学で解明されない病氣も多くある。かつては治療の原理が解明されず、近代医学で否定されていたホメオパシー治療は、現代医学の進歩により原理が少しずつ解明され、近代医学に代わる代替治療として欧米を中心に再び脚光を浴びている。日本ではまだホメオパシー治療を行っている人は極少数ですが、今後統合医療の重要な治療方法の一つとして日本で定着することが期待されている。

#### 10) 温熱療法

最近では統合医療とともに代替医療が注目を集めているが、代替医療の代表的なものに温熱療法があります。温熱療法とは体を温めることによって血液の循環を促し、病気の回復能力を高める治療方法である。人間の体は冷えると血液の循環が悪くなり、さまざまな不調が現れる。肩こり、腰痛、頭痛、疲れ、内蔵機能の低下、生理痛、生理不順などその症状は人によって多様である。そういった不調は体を温めることで症状の改善が期待できる。それは体を温めることで血液の循環がよくなる他、神経がリラックスして質のよい睡眠につながり、ストレスや疲れを解消することができるからである。もともと温熱療法はがん細胞が熱に弱いという性質に着目し、がんの代替治療として開発された治療である。がんの温熱療法には全身を温める全身温熱療法と、がん細胞とその付近を温める局所温熱療法がある。現在は局所温熱療法が一般的に行われている。最近では日本の病院でも統合医療が重視され、温熱療法は放射線治療や抗がん剤の効果を高める代替療法として、

他の治療と併行して行われている。がんと熱との関連性は昔から知られており、1960年代に本格的な研究が始まった。

未だ温熱療法は研究段階であり標準的治療ではあるが、治療の難しい局所進行がんや、再発がん治療の選択肢の一つとして考えられるようになってきている。近年、日本の多くの病院で温熱療法が導入され、保険の適用ともなり、今後が期待されている治療方法である。

#### V. アメリカにおける統合医療

今日、アメリカでは医療費が世界一の金額となり、医療費の増大が社会問題となっている。そして、それまでの西洋医療に限界を唱える声や、代替医療の治療費が比較的安価であることから、社会的に代替医療を求める動きが始まった。現在アメリカで代替医療を利用している人は国民の45%に上り、医療費は西洋医療による医療費を上回っている。また教育レベルの高い人ほど、なんらかの代替医療を利用していることも明らかになっている。代替医療を取り入れた統合医療の考えはアメリカの医学教授、アンドリュー・ワイル氏によって提唱されたことから始まった。ワイル氏は伝統医療や薬用植物などの研究を通じて、もともと人が持っている自然治癒力を最大限引き出すための医療が必要だと考えた。アメリカでは1990年代になるとさまざまな代替医療が注目を浴び、公的機関による研究、調査が活発に行われるようになった。1992年には世界的な医学研究施設である米国国立研究所の中に代替医療事務局が設立され、今日も代替医療の研究が進められており、ハーバード大学をはじめとするアメリカの医療系の大学の多くでも統合医療の考え方を取り入れた講義が行われ、統合医療の医師の育成に力を入れている。アメリカでは代替医療は普及したが、西洋医学と代替医療を取り入れた統合医療はまだ少ないのが現状である。さまざまな医療のよい点を合わせた効果的な治療が行われるために、医学分野の垣根を越えた医療の研究が進むことが求められている。日本でも近年、医療関連の記事などで統合医療という言葉をよく見かけるようになった。現在医療の現場では統合医療の必要性が高まっているが、統合医療を日本の医療現場に広めたのは、現在、東京大学名誉教授である渥美和彦氏によるものが大きいと考えられる。渥美氏はもともと人工心臓やレーザー医学などの西洋医学の分野では、日本の代表的な人物の1人である。数々の医学学会で活躍し、医学賞を受賞している国際的に名の知られた人物である。渥美氏は代替医療という言葉ができる以前から、医師として西洋医学以外の医療に関心を持ち、東洋医学などの研究をしていた。代替医療や統合医療という言葉が使われる以前には、「第三の医学」として統合医療を提唱していた。渥美氏は西洋医学の権威者でありながらも代替医療の必要性を説いていますが、

それは医学の最先端で試行錯誤を繰り返してきた人間であるからこそ、命のあるべき姿を痛感していると考えられ、渥美氏の考えは多くの人に受け入れられている。今日では代替医療や統合医療の考えは医療関係者に浸透し、統合医療を積極的に医療に取り入れる動きが見られている。日本では医科大学にも代替医療の講義が取り入れられ、医師の教育の場に統合医療の考えが重視されている。また大学の付属病院では統合医療による治療を取り入れる動きが見られる。統合医療の一人者である渥美氏は、現在も統合医療を日本に定着させるため、あらゆる分野へ精力的に働きかけている。渥美氏の働きによって統合医療は日本の医療に大きな変革期をもたらそうとしている。

## VI. 東洋医学と漢方

近年、医療の現場では統合医療の導入が始まりつつある。統合医療で取り入れられる代替医療で最もよく知られているものは漢方である。漢方は古代中国で始まった中国伝統医学で、日本に伝わった後に日本独自の進化を遂げた伝統医療である。漢方薬による治療だけではなく、鍼や灸なども含まれている。中国から朝鮮半島を渡って日本へ伝わったのは6世紀中頃と言われ、長い歴史を持っている。日本では明治以降、西洋医学が医療の中心となったが、それまでは漢方などの伝統医療を中心とした病気の治療が行われていた。西洋医学が取り入れられると漢方は次第に衰退し、公的な医学教育からも排除された。その後は医療とは別のものとして存在し、現在も多くの漢方の医師は西洋医療の医師とは別の場で治療を行っている。近年になり漢方の需要が急速に高まり、医学部の講義に加えられるなど、再び医学教育の場に漢方医学が取り入れられている。漢方は人がもともと持っている自然治癒力を高め、身体のバランスを整えることで不調を改善することになる。そのため患者一人一人の病状や体質を診断し、それぞれに最適な治療を行う。漢方は西洋医学では解決が難しいあらゆる病状に対処できることが認められ、今日、多くの医師が漢方薬を診療に使用している。最近では癌の治療においても西洋医学と漢方による統合医療が行われている。特に高齢化やメタボリックシンドロームが社会問題となっている日本では、統合医療における漢方は重要な役割を果たす医療と考えられている。

## VII. 統合医療と実際の病気

がんは現在で世界的に最も多い病気の一つである。がんの治療はこれまで現代医学による研究が進められてきたが、未だ治療の難しい病気である。日本の病院で一般的に行われているがん治療は大きく分けて、手術、薬、放射線の3つである。これらの方法はがん細胞を取り除くという西洋医学に基づいた治療方法である。手術は体内のがん細胞を体から直接

切り取る確実な方法であるが、がん細胞を一つ残らず切り取ることは難しく、再発の危険はなくなる。また患者の体へ大きな負担を与えることにもなり、病気が回復しても身体的、精神的に大きな障害を残すことにもなる。抗がん剤、放射線治療はがん細胞に毒を与えて消滅させる方法であり、この方法ではがん細胞以外の健康である細胞にも毒が及ぶ可能性がある。健康な細胞に毒が及ぶことで、病状が悪化する場合もあり、このようにがん細胞を取り除く方法は、現代の医療では体への大きな負担が避けられないのが実情である。

近年がん治療において、これまでの西洋医学で不十分な治療を、代替医療で補う統合医療の重要性が唱えられるようになった。

長い歴史をもつ東洋医学をはじめ、食事療法や免疫療法などの代替医療では、体がもつ自然治癒力や免疫力を高めることを基本としている。がんを克服するためには、がん細胞を取り除く西洋医学の治療と、体の自然治癒力や免疫力を高める代替医療を組み合わせることが大切だと考えられている。実際にアメリカでは栄養療法や温熱療法、免疫療法などの代替医療による治療が取り入れられ、がんの治癒や病状改善効果を実証しており、また近年、うつ病は日本人男性の10人に1人、女性の5人に1人が人生で一度は経験するといわれるほど多い病気となっている。うつ病とは、何かの原因によって生きる意欲を喪失し、憂うつ感や興味、関心が低下するなどの精神的な症状や、人によっては食欲不振や不眠、倦怠感などの身体的な症状が伴う病気である。

辛い症状のために自殺をする人もいるほど深刻な病気で、かつてうつ病は「こころの病気」と捉えられていたが、最近では「脳の病気」として捉えられるようになり、脳で分泌される原因物質を抑えることで、症状を緩和する薬が治療で使用されている。うつ病の人のうち、治療を受けている人はごく僅かだといわれているが、今日では医学の進歩によりうつ病は治療によって治る確率の高い病気となっている。これまでのうつ病の治療は近代の西洋医学が基本で、精神科や心療内科において投薬中心の治療が行われてきた。投薬中心の治療では、患者に憂うつ症状があれば抗うつ剤、不眠の症状があれば睡眠薬、不安があれば抗不安薬というように、患者が訴える症状に応じて、薬の種類は増えて行くようになる。このような対処療法は一時的に症状を緩和することはできるが、根本的な原因を取り除くことはできない。うつ病の原因には偏った食事や不規則な生活習慣によって、脳に栄養不足が起きている場合が多くある。近年、注目されている代替治療では「なぜうつ病になったか」という原因を追究し、治療してゆくようにしている。うつ病の治癒には病気の原因を取り除くことが必要であり、そのためには代替医療

と、必要に応じて西洋医学を取り入れた統合医療が行われることが重要だと考えられている。

## VIII. 統合医療と医療費

近年、日本では高齢化が進み、生活習慣病が増加している。それに伴い医療費の増大が深刻な社会問題になっている。厚労省によると現在のペースで少子高齢化が進んだ場合、2050年には3人に1人が65歳以上になると予想されている。また、現在の医療保険制度を持続してゆくと、国民医療費の総額は2025年には約49兆円となり、現在の1.7倍にも膨れ上がることが予測される。これは現在20代から40代の人が老人対象となるころに、国民医療費が国家財源になることを意味している。急速な高齢化の進展によって医療費は増大し、就労人口の減少により納税は減少することから、このままでは日本の医療費は深刻な財源不足になることは避けられない。このような実態から、日本の医療制度の見直しが急務であると思われる。今日、医療現場においては統合医療が重視されている。このような実態から、日本の医療制度の見直しが急務であると思われる。今日、医療現場においては統合医療が重視されている。統合医療とは今までの西洋医療に、サプリメントや漢方などの代替医療とはこれまでの西洋医療に、サプリメントや漢方などの代替医療を効果的に取り入れる治療のことである。日本と同様に医療費の増加が問題となっていたアメリカでは、現在定着しつつある医療である。現在は医療において治療に代わり予防の重要性が指摘されている。代替医療の多くは体の自然治癒力を高めることによって、病気の発生する前に予防することを基本としている。また、代替医療では治療に最先端の医療機器を使用しないため、医療費の削減につながる。日本では欧米に比べまだ統合医療は国民に浸透していないが、今後医療関係者によって積極的に統合医療が取り入れられることが望まれる。

## IX. 中国における統合医療の現状ならびに考察

国陝西省西安交通大学医学院動物実験センター主任の劉 恩技教授から学術講演会を設営し、2008. 11. 10. に西安交通大学医学院で倉林が「代替、相補、統合医療としての鍼灸」と題して学術講演を行ったことならびに西安交通大学医学院附属病院リハビリセンター長の王 忠華教授(80)、81)ならびに副センター長の王鎖良教授にセンターの見学をさせていただき、すでに統合医療システムで、患者の診療を行っており、実践していることに驚嘆した。鍼灸・粹拿、理学療法、運動療法、マッサージ、疼痛疾患の鎮痛治療等わが国より一歩進んでいる診療システムをすでに導入していることを目の当たりに見学できたことは素晴らしいことと思えた。中西医结合医療：西洋医学と中医学(中国伝統医学)とはまったく別の考え方の医学であるが、双方の特徴を

生かした形で治療が行われる医療即ち、中西医結合医療がすでに実施されている。攻撃力の強い西洋医学の利点を活かし欠点を補うために中国医学を併用することで様々な可能性が広がるのである。中医はすべて医師が中医学ならびに西洋医学を勉強し、どちらの治療もできること、しかし、それ以外の治療法については専門家がいて、医師の中でも更に専門的な治療法はアメリカ等で学んだ技術を持っている医師がいることなどが即座にその治療体制に移行したことが考えられる。わが国においては、医師は東洋医学(漢方医学)を行なう者が多いが、鍼灸を行う者は少ないこと、鍼灸医学を行う者(鍼灸師)は、西洋医学を行うことが出来ないこと、西洋医学を行なう医師は、資格的には全ての医療に対してオールマイティーであるが、技術的に慣れていない医師が多いことなどが統合医療を遅らせている原因ではなかろうかと思われる。西洋医学と東洋医学の考え方の違いは、「病気を治す」という目的が同じとはいえ、西洋医学と東洋医学では、考え方の違いがあり、その結果、得意分野も違ってくる。例えば、いくつかの病気を同時に持っている患者がいるとすれば、西洋医学の場合は個々の病気ごとに専門医師が違い、薬も別々に投与されるケースがほとんどである。たくさんの病気を抱えた人が、病院のはしごをするというのはよく聞く話であり、また、膨大な量の薬を服用しなくてはならない。

しかし東洋医学では、同時にいくつかの病気になるのは体のホメオスタシス(自己回復力)の機能が衰えたこと考え、病気ひとつひとつを考えるより、体全体で考えるわけであるから、一種類の処方に対応することも可能である。つまり、西洋医学では病気の原因は「悪」であり、取り除くべきものですが、東洋医学では、生体内の「陰」と「陽」のバランスの乱れた結果と考えるので、バランスの乱れを正せば病気が治ると考えられる。また、西洋医学では、精神と肉体は相互に影響を与えるものの、別のものと考えられているが、東洋医学では、精神と肉体はお互いに影響を与え、総合的に考える。このように考え方やアプローチの仕方が違い、東洋医学は西洋医学的立場からは冷遇されていた時代もあったが、最近では西洋医学の中に東洋医学的な考え方を取り入れる医師も増えつつある。東洋医学だけでなく、世界各地の伝統医療(インド医学のアーユルヴェーダなど)や民間療法(アロマセラピーやホメオパシーなど)、サプリメントなどの幅広い「代替医療」は、アメリカをはじめとした欧米各国でも研究が進められている。21世紀は、西洋医学と東洋医学を融合させ、それぞれの利点を生かしていくホリスティック医療(ギリシャ語で「全体」を意味するホロスから来た語)の時代だといえるのではなかろうか。

## <結語>

以上のように、西洋医学および東洋医学とも「病

気を治す」という目的には両者に違いは無いが、その考え方には違いがある。例えば、複数の病気を持っている患者が居れば、個々の病気に対して病院が異なるので病院のはしごをしなければならず、処方される薬物を一度に沢山服用しなければならない。

東洋医学では同時にいくつかの病気になるのは体のホメオスターシス（自然治癒力）の機能が衰えたと考え、ホリスティック（体全体）で考え、一種類の処方に対応することも可能である。西洋医学では病気の原因は「悪」であり、取り除くべきであると考えるが、東洋医学では生体内の「陰」と「陽」のバランスの乱れた結果起こると考え、このバランスを正せば病気が治ると考える治療法がある。このように西洋医学では精神と肉体は相互に影響を与えるものの、別々な物として考えているが、東洋医学の生理学的な研究も進んでおり77)、精神と肉体とはお互いに影響を与えると総合的に考えている。

以上のように東洋医学と西洋医学を癒合させ、それぞれの利点を生かしてゆくホリスティック医療を行なうことによって、自然治癒力を高めてゆこうとする21世紀の治療といえるものである。この統合医療(Integrative Medicine)78)、79)を中国陝西省西安交通大学医学院リハビリセンターで行っているように「頸椎ならびに腰椎椎間板ヘルニアのラジオ周波数熱凝固へのアプローチ」80)や「頸椎椎間板ヘルニアについての局所針治療における治療効果の観察」81)に見られるように、わが国で行なうには、各治療分野のエキスパートを集め、できれば地域ごとに「統合医療センター」を設立し、それぞれのエキスパートが集まって治療方針を立て各種患者個体の治療者の受け持ち分担を決め、チーム統合医療を行なうことが重要である。

日本においてこの「統合医療」を行なうには、NIH(国立衛生研究所)の国立相補・代替医療センター(NCCAM)やハーバード大学医学部でもCAMと統合医療の研究所が設立されているように、早急にチーム統合医療を行なうことが望まれる。統合医療を行なうためには、つぎのようなコンセプトで行なうことが重要である。1)ホリスティック(全体的)に健康観をとらえること、2)自然治癒力を癒しの原点におくこと、3)患者が自ら癒し、治療者は援助する、4)様々な治療法を選択・統合し、最も適切な治療をおこなうこと、5)生と死のプロセスの中、自己実現を目指す患者本位の考え方をすることなどが大切なことであり、医療費高騰の折、早急に実践すべきである。

なお、このような補完・代替医療は、今後、動物実験等により基礎的な研究の弛まない研究により、この補完・代替医療の基礎データの積み重ねにより、よりよい臨床効果が期待できる。そしてまたこの療法の効果を高めることになりうると思われるので、この療法に携わる者の弛まない努力が、基礎医学研究者並びに臨床家に必要であると思われる。

## <謝辞>

本論文の作成に当たり、岡山大学医学部消化器外科学の田中紀章名誉教授ならびに藤原俊義教授にご指導を得たこと、全臨床の三宅賢治先生に講演の機会を与えていただいて森ノ宮医療大学にて特別講演会を行ったこと、中国上海中医药大学の動物実験センター主任の湯家銘教授に特別講演会を開催いただいたこと、中国陝西省西安交通大学医学院動物実験センター主任の劉恩技教授から学術講演会を設営していただき、2008.11.10.に西安交通大学医学院で倉林が「統合医療と針灸学」について学術講演会を行ったことならびに西安交通大学医学院附属病院リハビリセンター長の王忠華教授ならびに副センター長の王鎖良教授にセンターの見学と文献80)、81)を戴いたことに対して深謝する。

## <参考文献>

- 1) 木下晴都：鍼灸学原論、東京：医道の日本社：1～336, 1976.
- 2) 西条一止、佐藤優子、笠原典之：鍼の科学、東京：医歯学出版、：1～92, 1982.
- 3) 高島文一、川俣順一：鍼灸への招待、東京：裳華房：1～180, 1994.
- 4) 米山 栄、佐々木和郎、真鍋立夫、富所保仁、東郷俊宏：肩凝りと鍼灸治療、東京：医道の日本社：21～49, 2006.
- 5) 赤尾清剛、粕谷大智、松本 淳、首藤伝明：慢性疲労症候群と鍼灸治療、東京：医道の日本：1:115～139, 2006.
- 6) 森 和、東郷俊宏、鈴木 聡、北川 毅、前川真理子：美容と鍼灸、東京：医道の日本：23～104, 2006.
- 7) 蠣崎 要、谷 美智士：婦人科の針治療(緑書房)、1～93, 1975.
- 8) 尾崎昭弘、坂本：鍼灸医療安全ガイドライン、東京：医歯薬出版：1～166, 2006.
- 9) 日座宏明：漢方で癒すドライシンドローム、東京：環健出版社：1～978, 2008.
- 10) 谷美智士：東洋医学と西洋医学、伝統医学と科学の結合が病気を治す。1～490, 1997.
- 11) 第58回日本東洋医学会、日本東洋医学会雑誌、58:1～281, 2007.
- 12) 第59回日本東洋医学会、日本東洋医学会雑誌、59:1～271, 2008.
- 13) 日本サプリメントアドバイザー認定機構：サプリメントアドバイザー必携第3版、東京：薬事日報社：1～978, 2008.
- 14) M. twinmaman：微量栄養元素、健康と病気を理解するために。1～498, 2008.
- 15) 小沢 明；いわゆる健康食品・サプリメントによる健康被害症例集、東京：同文書院：1～



- 978, 2008.
- 16) 同文書院：健康食品のすべて第2版、ナチュラルメデイシン・データベース、東京：同文書院：1～498, 2008.
  - 17) 中村祥二：香りの世界を探る、調香師の手帳、東京：朝日新聞社：1～578, 2008.
  - 18) 山田幸枝：ハーブと私、東京：JPS：1～673, 2008.
  - 19) 佐々木薫：もっとおいしいハーブティー、東京：誠文堂新光社：1～59, 2008.
  - 20) 上田恵子：スパイス&ハーブでお招き料理、東京：ザメデイアジョン：1～596, 2008.
  - 21) リエコ大島、バークレー：英国流メデイカルハーブ東京：説話社：1～199, 2008.
  - 22) Gakken Interior Mook：ナチュラルガーデニングのハーブスタイル、東京：学習研究社：1～617, 2008.
  - 23) 鷹谷宏幸：ハーブノート、東京：グラフ社：1～617, 2008.
  - 24) エイ・デイ・えい：糖尿病を治すアーユルヴェーダーの不思議、古代インド哲学の驚くべき治療力を検証する、1～493, 2008.
  - 25) 高橋佳璃奈：アーユルヴェーダー式手作りコスメ&クッキング、安心、簡単、ハーブと食材で作る、東京：ビーエービージャパン：1～363, 2008.
  - 26) 鷺見東観：糖尿病は治るインド哲学のすごい効果、東京：史輝出版：1～493, 2008.
  - 27) 鷺見東観：インド哲学で糖尿病は完治する、東京：史輝出版、1～978, 2008.
  - 28) 小澤美佐子：ヨーガ呼吸で生を豊かに、東京：文芸社ビジュアルアート：1～87, 2008.
  - 29) 立川武蔵：ヨーガと浄土東京：講談社：1～181, 2008.
  - 30) 山内宥巖：二人ヨーガ楽健法、東京：楽健法：改訂9版、医者に頼らず生きる術、1～49, 2008.
  - 31) シュリマエシュ：ヨーガに生まれる、科学と伝統、東京：牧歌舎：1～434, 2008.
  - 32) 赤根彰子：こころのヨーガ(アノニマスタジオ)、1～159, 2008.
  - 33) 井坂艶子：顔晴れヨーガレッスン誰にも出来る、ヨーガ健康法入門東京：知玄社：1～498, 2008.
  - 34) 小野さつき：キレイにやせるシンプルヨーガ、東京：新星出版：1～405, 2008.
  - 35) 科学新聞社：カイロプラクティック経営成功哲学、東京：科学新聞社出版局：1～92, 2008.
  - 36) 大川 泰：カイロプラクティック誰でもが成功できる理由、感謝されて、楽しく豊かになれる「独立ビジネス」東京：現代書林：1～492, 2008.
  - 37) 科学新聞社：症状別カイロプラクティックハンドブック東京：科学新聞社：1～84, 2007.
  - 38) 現代書林特別取材班：[癒しの学校]ガイド、独立開業の夢かなう、東京：現代書林特別取材班：1～492, 2008.
  - 39) 日比野 喬：ひとりのできる驚異のツボ指圧療法、東京：土屋書店：1～1029, 2008.
  - 40) オクムラ書店編集部：手で癒す医療・美容・健康スクールガイド、東京：オクムラ書店：1～498, 2008.
  - 41) たにぐち書店：オランダ指圧漫ユウキ遊記、谷口書店、1～34, 2007.
  - 42) 講談社インターナショナル：超指圧、東京：講談社：1～299, 2006.
  - 43) ワンダーセラー著、高山林太郎訳：アロマテラピーのための84の精油、東京：フレグランスジャーナル社：1～195, 2004.
  - 44) ロビン・ヘイフィールド著、金子寛子：ホメオパシー治療薬、化学薬品を使わない・安全で身体に優しい東京：産調出版：1～499, 2007.
  - 45) ネルソン・ブラントン著、衣川瑞水訳：ホメオパシー、東京：類似療法：フレグランスジャーナル社、1～59, 1995.
  - 46) 五十嵐康彦：リフレクソロジー大全、東京：家の光出版・株：1～381, 2004.
  - 47) Pauline Wills 著、吉元昭治、平山博章：図解リフレクソロジー・マニュアル、1～147, 2004.
  - 47) ニコラ・ホール著、林サオダ訳：リフレクソロジー東京：フレグランスジャーナル：1～152, 2004.
  - 48) アン・ギランダース著、宮田摂子訳：クイック・リフレクソロジー、東京：産調出版株：1～140, 2004.
  - 50) 塩瀬静江：リフレクソロジー事典、1～272, 2004.
  - 51) アン・ギランダース著、ミッシェル松山訳：リフレクソロジー東京：産調出版・株：1～143, 2004.
  - 52) さんぽう：癒し(ヒーリング)セラピスト・代替医療、療法系仕事につく、1～43, 2008.
  - 53) Katsusuke Serizawa: CLILNICAL ACUPUNCTURE、東京・ニューヨーク：Japan Publication Inc.：1～231, 1989.
  - 54) Katsusuke Serizawa: Tsubo-Vital Points for Oriental Therapy, 東京：1～256, 1989.
  - 55) Katsusuke Serizawa: Massage, The Oriental Method、東京：Japan Publication Inc：1～78, 1990.
  - 56) 土屋健三郎：医療のための人間学、東京：啓文堂：1～229, 1984.
  - 57) 石原結実：間違いだらけの医学・健康常識、西洋医学を過信すると早死にするという東京：日本文芸社：1～978, 2005.
  - 58) 上馬場和夫：代替医療&統合医療イェローペー、西洋医学の限界を補う古くて新しい医療、東京：MNS：1～309, 2005.
  - 59) 加納竜彦：痛みのマネジメント西洋医学と鍼灸医学からアプローチ、東京：医歯学出版：1～263, 2005.

- 60) 清水宏幸：新しい医療革命、西洋医学と中国医学の結合、東京：1～490, 2005.
- 61) 史輝出版：ガン臨床医が実証した！！ガンが消えた、東京：史輝出版、1～50, 2003.
- 62) メジカルビュー社：ゲノム医療5, 1, 2005.
- 63) 中村祐輔：ゲノム医学からゲノム医療へ、イラストで見るオーダーメイド医療の実際と創薬、開発の新戦略、1～467, 2004.
- 64) 黒木登志夫、珠玖 洋；最先端のガン研究と治療の展開、分子標的治療、目療法、ゲノム医療から最新の外科療法まで、東京：用土社：1～494, 2004.
- 65) 中経出版：病気にならない漢方生活、東京：中経出版：1～490, 2008.
- 66) 代田文誌：針治療の実際、創元社、1～641, 1974.
- 67) 長浜善夫：鍼灸治療の新研究、創元社、1～383, 1973.
- 68) 森山健三；漢方の目で健康を考える、東京：医歯学出版：1～263, 2008.
- 69) 水嶋丈雄、横山タカ子：食べて元気になる漢方ごはん、長野：信濃毎日新聞社出版局：1～50, 2008.
- 70) 前田 泉、徳田茂二：患者満足度—コミュニケーションと受療行動のダイナミズム、東京、日本評論社、1～168, 2005.
- 71) 日座宏明：漢方で癒すドライシンドローム、東京：環健出版社：1～978, 2008.
- 72) 横山茂之、松尾 洋、藤井 充、木川隆則ら：構造ゲノム科学入門、実験医学、6, 8, 19, 930～967, 2001.
- 73) 井原康夫、枡 正幸、津本忠治ら：脳科学研究の最先端、実験医学、12, 18～19, 2636～2680, 2000.
- 74) 青山 正：激痛・病気が消える第三の医療、5日で学べる健康対話、西洋医学・東洋医学の区別を超えた治療、東京：現代医療：1～356, 2002.
- 75) 立岩清美：西洋医学の弱点とスギナ健康法、自然の中にこそある健康の原点、東京：文芸社：1～285, 1999.
- 76) ジョンZパワーズ著、金子卓也訳、鹿島友義訳：日本における西洋医学の先駆者たち、東京：慶応義塾大学出版会：1～723, 2008.
- 77) A. Sato, Y. Sato, R. F. Schmidt 著、山口真二郎監訳、志村まゆら：体性—自律神経反射の生理学、中枢神経内処理(経絡、作用様式)、東京：シュプリンガー・ジャパン：49-79, 2007.
- 78) 今西二郎：補完・代替医療統合医療、東京：金芳堂：1～1361, 2008.
- 79) 旭丘 光志：統合医療の力、絶対あきらめない見放さない全方位治療、東京：実業日本社：1～408, 2007.
- 80) Wang Souliang, Lu Jianguo, Shen Xiao dong, Wang Zhonghua: The application radio-frequency termocoaguration and targetabla- ablation in cervical and lumber intervertebral disc herniation, Department of Rehabiritation and Pain, First Affiliated Hospital, Medical School of Xian Jiatong University, Xi' an 710061, China
- 81) Wang Zhong-hua: Treatment Observation of Localizational Acupuncture on Cervical Intervostebial Disc Herniation, Acupuncture Department, First Affiliated Hospital of School of Medicine, Xi' an Jiatong University, Xi' an 710061